【解説】

修行の最初の段階の煩悩と最高の境地の不動智とが、修行を通じて一つとなり、達人は無念無想、無心の境地に落ち着くというのです。

（3）理（こころ）の修行、事（わざ）の修行

剣道には「事理一致」の教えがあります。「事理一致」について、北辰一刀流の千葉周作をはじめ、一般的には、事は技術、理は理論と解釈し、技術と理論を一体化させるよう修錬していくことが大切である、と説明されていますが、実は、「事理」という言葉は仏教の用語で、理は本体、事は作用を意味します。目に見える現象作用（事）の背後に本体（理）が隠れているというのが仏教の認識論です。本体と作用はもともと分離できない一体のものである、というのです。本体即作用の考え方です。

剣術に当てはめていえば、本体としての心が、目に見える現象すなわち技として現れるということです。本体（こころ）と作用（わざ）とは一体です。したがって、本来の意味からいえば、沢庵禅師が提唱した「事理一致」とは、技と心を一致させよ、という意味です。事は技、理は心で、技と理論ではありません。

▼【原文】

一　理の修行、事の修行と云事あり。わざとは手足にてする事を云なり。初は兵法を習稽古候時、身がまえ、太刀、三箇九箇などの色々様々の事を年月を重て能々稽古する、是を事の修行といふなり。

又、理の修行と云は、一心の上の至極成所を能々可得心ための修行なり。事の修行計にては万の所作へ不至也。

又、理の修行計にても、事の修行なく候えば、手足も身も自由にははたらかず、太刀が自由につかはれ申まじく候。然ば事と理の二つは車の兩輪のごとく也。一心に能納て手足に稽古候えば相應いたすべきなり。

【訳文】

一　理の修行、事の修行ということがあります。わざとは、手足ですることをいいます。最初は、兵法を習って稽古する時には、身構えや、太刀の持ち方、（柳生流の「三学」（身構、手足、太刀）や「九箇」（太刀のわざ九本）などいろいろとさまざまな技を年月を重ねてよく稽古します。これを事の修行というのです。

また、理の修行というのは、心の最高の境地をよく心得るための修行です。わざの修行だけではさまざまな所作が上手にできません。

また、理の修行だけで、事の修行がなければ、手足も身も自由に働かず、太刀が自由に

使えないでしょう。ですから、事と理の二つは車の両輪と同じです。心によく納得した上で、手足で稽古したなら、一致させることができるでしょう。

【解説】

「理の修行」とは、心を自由に働かす修行です。無念無想の境地、最高の無心の境地を探究する工夫であるといってよいでしょう。そこには当然のことながら、理論の研究も含まれています。

「事の修行」とは、さまざな技術を習得する修行です。心の修行を積むだけでは、身体や手足を自由に働かすことができません。沢庵禅師は、「理」を心理、「事」を実技とし、両面で修行せねばならない、と説いています。

柳生新陰流において初心者が学習する技として、書陵部本では「三箇九箇」を挙げていますが、狩野文庫本では「五箇九箇」となっています。これは、柳生流の「三学圓之太刀」五本、「九箇之太刀」九本のことです。『沢庵禅師全集』の活字本では、「五箇に一字」となっていますが、これは「五箇三学」を活字に起こす際に誤読したためでしょう。「五箇に一字」では意味が通じません。

沢庵禅師は、実技の修行と、心の修行を同時に行わねばならない、と説いています。これは、技と心を一致させよ、ということです。

山岡鉄舟は、その「無刀流剣術大意」において、「理事の二つを修業するに在り。事は技なり、理は心なり。事理一致の場に至る、是を妙処と為す」と述べています。彼は沢庵禅師の事理一致の教